

年譜 秋山駿

一九三〇年（昭和五年）

四月二三日、東京都池袋、立教大学の傍に生まれる。父登利男、母照子の二男、兄に浩。父は鉄道省の官吏、母は信州須坂市の浄運寺の三女。嫁入り道具は要らないから学費をくれと単身上京、日本女子大学国文科を卒業した。

一九三六年（昭和十一年） 六歳

右耳の中耳炎が悪化、新宿の鉄道病院で手術。準備室の笑気ガスと手術室の光景が、生の最初の記憶となる。

一九三七年（昭和十二年） 七歳

池袋第五小学校に入学。入学当日から右耳が聞こえぬために右隣の男子と喧嘩。父の転任により、鶴見、名古屋、また東京と転校の毎に同じことを繰り返す。名古屋では紀元二六〇〇年の行事が記憶に残り、太平洋戦争の開始は杉並第二国民学校五年生のとき、これも鮮明な記憶である。

一九四三年（昭和十八年） 一三歳

都立十中に入学。一年生のとき母が結核で死ぬ。二年生の途中から三鷹の日本無線に勤労働員。友人から本を借り、手当たりしだいに日本近代文学を乱読。

一九四四年（昭和十九年） 一四歳

登利男が再婚、継母は家中千賀子。

一九四五年（昭和二十年） 一五歳

八月一日、敗戦の放送を日本無線で聞く。以後、あまり学校へ行かず、友人数名と新宿、渋谷、銀座の街を歩き回るばかり。その二年間に、中原中也、小林秀雄、ランボオ、ドストエフスキーを一挙に知る。

一九四六年（昭和二十一年） 一六歳

妹美智子誕生。

一九四八年（昭和二十三年） 一八歳

早稲田第二高等学院に入学。SL組で、これは太宰治的な小説を書きたい若者と、革命志望の青年ばかりが集う奇妙なクラスであった。早熟の文学青年清水一男を知る。彼の父の別荘が桜台にあり、その広い二階に彼は一人で住み、そこに哲学者出隆の長男出英利が同居していた。太宰治と三島由紀夫の対面を、出英利がこの家でおこなった。清水のところに沢山の本、ドストエフスキー全集あり、ヴァレリー全集ありで、私は乱読、ことに「テスト氏」に熱中した。一年後、早稲田大学文学部仏文科に移行。

一九五二年（昭和二十七年） 二二歳

六月、清水一男の発意によって、同人誌「批評派」を創刊。私は最初のエッセイ「石塊にはひとつの物語がある」を書く（『内部の人間』に収録）。誌面に早世した相澤諒の詩が載り、同

人の一人が相澤諒論を書いた。表紙は詩人吉岡実が描いてくれたという。私は大学二年の頃から、道端から拾ってきた石ころを机に置き、いろんな問い掛けをしていた。

一九五三年（昭和二十八年） 二三歳

三月、大学卒業。その後三年ばかり、会社勤めができず、ただ家にいた。昼間はひとりで街を歩き回り、夜は眼の前の壁の汚点と対話するのが日課であった。壁の汚点を、ドストエフスキ―『白痴』でイッポリートがいう「マイエルの家の煉瓦壁の汚点」になぞらえた。

一九五六年（昭和三十一年） 二六歳

六月、報知新聞社に入社。最初文化部記者であったが、二年後、文化部は廃止、整理部に移った。整理部で直面する印刷職員の生活と意見が、私の社会勉強であった。

一九五七年（昭和三十二年） 二七歳

祖母千代が、私が抱き起こした腕の中で死ぬ。私は後を継母に託し、そのまま会社へ。

一九五九年（昭和三十四年） 二九歳

五月、宇都宮大学教授古川茂の長女法子と、東京西郊のひばりが丘団地に入居。親族とはすべて絶交、結婚式も結婚届もしなかった。前年「批評派」の一部の者が同人誌「れありて」創刊。一〇月、「小松川女高生殺しとイッポリート」（第二号）を書く。

一九六〇年（昭和三十五年） 三〇歳

五月、「小林秀雄」で「群像」新人文学賞評論部門を受賞。しかしその後三年ほど低迷。また、この頃、村松剛に誘われ「批評」の同人になった。

一九六三年（昭和三十八年） 三三歳

早稲田時代の友人大河内昭爾に誘われて「文学者」に、八月、中原中也論「内部の人間」、一月、小松川女高生殺し事件を主題にした「想像する自由」（『内部の人間』に収録）を発表。この「想像する自由」が久保田正文の「文学界」の同人誌評でほめられ、また、三島由紀夫に認められたことから、文芸誌に再出発する道が開けた。

一九六四年（昭和三十九年） 三四歳

一月、「イッポリートの告白」を、二月、「意識のリアリズム」を、四月、「抽象と現実」を、七月、「石塊の思想」を「文学者」に、一〇月、「小説とは何か」を「現代文学序説」に発表。「時代小説について」を一〇、一一、一二月と「文学界」に連載。よくもこんなジャンルのものを書かせてくれたといまさらに感心する。十一月、「退屈な観点」を、十二月、「ぼくは自分をもたない」を「文学者」に発表。

一九六五年（昭和四〇年） 三五歳

二月、「中原中也」を、三月、「抽象的な人間」を「文学者」に、四月、「批評は芸術か」を「批評」春季号に、六月、「いくつかの暗礁」を「文学者」に、七月、「小説に何を求めるか」を「文学界」に、九月、「抽象的なノート」を「文学者」に、十一月、「単純な人間の小説」を「群像」に、『眠狂四郎無頼控』一（新潮社）に解説「剣の魅力と柴田錬三郎」を、十二月、「私とは何か」を「審美」に発表。

一九六六年(昭和四一年) 三六歳

二月、「小説のリアリティ」を「文芸」に、六月、「自己回復のドラマー小林秀雄の一面」を「文学界」に、七月、「抽象的な生活」を「南北」に、八月、「現代小説の行方」を「群像」に、一〇月、「悪の場面」(発表時「悪の宝庫を求めて」)を「新潮」に発表。

一九六七年(昭和四二年) 三七歳

一月、第一評論集『内部の人間』(南北社)を刊行。四月、「殺人考」を、八月、「内部の死」を「文芸」に発表。すこしずつ理由なき殺人の問題に近付こうとした。三月、「小説は変わる」を「文学界」に、五月、「小説は虚構か」を「群像」に、「長いものそれは何故長い」を「文学者」に発表。小説というものに違和感があった。「何かを、もっと多くを」(発表時「私の貧乏物語」)を「潮」別冊夏季号に、九月、「八月十六日の記憶」(発表時「日本のいちばん短い日」)を「潮流ジャーナル」に。これらは戦後という時代への関心から。一一月、「小林秀雄の戦後」を「群像」に発表。

一九六八年(昭和四三年) 三八歳

一月から「三田文学」で、江藤淳、大江健三郎、安部公房、三島由紀夫……と作家一六名に文学インタビュー。六九年三月まで(『対談・私の文学』に収録)。一月、「わがプルターク」を「季刊芸術」冬季第四号に、四月、「金嬉老の犯罪」を「中央公論」に、「幻影の時代」(発表時「江藤・大江絶交始末記」)を「新潮」に、「私は小説に求める」を「風景」に、六月、「沈黙は証言する」(発表時「私は盲目になろう」)を「武蔵大学新聞」に発表。「想像する自由」が『全集・現代文学の発見』(學藝書林)の第一〇巻「証言としての文学」に収録される。七月、「模索するもの」を「群像」に、八月、「笑いと貝殻」を「文芸」に、「批評の魅力」(発表時「新しい魅力がほしい」)を「三田文学」に発表。

一九六九年(昭和四四年) 三九歳

三浦哲郎に誘われて、「早稲田文学」の編集委員になり、二月号(復刊第一号)から「歩行と貝殻」を連載。七〇年二月号完。「――以下は私という単純な主格の行なうとりとめのない人形劇に過ぎない」というエッセイの第一作目で、第二作目は『内的生活』、第三作目が『舗石の思想』である。二月、「虚構・言葉・想像力をめぐって」を「文芸」に、「裸の眼と成熟」を「国文学」に、三月、「彼等はドブネズミのようだった……」(発表時「廃墟」)を「情況」に、四月、「言葉と声と思想」を「群像」に、七月、「現実は要求する、さらに深く問え」を「朝日ジャーナル」に、八月、「私こそ恐怖へ歩け」を「現代詩手帖」に、一〇月、「簡単な生活」を「季刊芸術」第一一号に、一一月、「小林秀雄と文体」を「国文学」に、二月、「必要のない人間」を「展望」に発表。六月、『無用の告発』(河出書房新社)刊行。一〇月、『対談・私の文学』(講談社)刊行。

一九七〇年(昭和四五年) 四〇歳

二月、「貧乏人の言葉」を「風景」に発表。三月、『抽象的な逃走』(冬樹社)刊行。四月、『歩行と貝殻』(講談社)刊行。山本美智代印刷画集『銀鍍金』に「十九歳の死」を、五月、

「ヴァレリーと三島由紀夫」を「国文学」に発表。六月から「東京新聞」で文芸時評を始める（七三年一二月まで）。七月、「ドアがしまる」を「文学界」に、九月、「おかしな病氣」を「新潮」に、一〇月、「わがサディズムー内的なものとしての性」を「えろちか」に、一一月、「知的接吻の記憶」を「国文学」に、一二月、「何が引き金を引かせたか」を「流動」に発表。この年は報知新聞のストライキが激しく、ロックアウトも経験した。一一月、三島由紀夫の自決にショックを受け、ささやかな決心をして一二月、会社を辞めた。

一九七一年（昭和四六年） 四一歳

一月、「英霊の声・憂国」を「新潮・三島由紀夫読本」に、二月、「三島由紀夫語録」（発表時「〈三島語録〉その精神の軌跡」）を「文芸春秋」に発表。これは七〇年の「ヴァレリーと三島由紀夫」（「国文学」）の延長上にあるもの。四月、「群像」編集長の命令で日本大学芸術学部非常勤講師になる。伊藤礼に教室の作法を教えられた（七九年まで）。小川徹の誘いで、自分でも意外な文章、「裸と壁」（四月）、「裸と棘」（六月）を「映画芸術」に、「想像のなかの悪」（八月）を「えろちか」に書いた。六月、高橋和己『我が心は石にあらず』の解説を新潮文庫に、七月、「同世代の人」を「文芸・高橋和己追悼特集号」に、八月、『埴谷雄高作品集』2（河出書房新社）の解説、「小林秀雄の『神』」を「すばる」に、九月、大江健三郎『叫び声』（講談社文庫）の解説、一〇月、高橋和己『暗黒への出発』（徳間書店）の解説を書く。一一月、『時が流れるお城が見える』（仮面社）刊行。

一九七二年（昭和四七年） 四二歳

四月、早稲田大学文学部文芸科の非常勤講師になる（七九年まで）。時代が変わり目だったのだろう、現実の方が文学より鋭い問いを発していたので、「女を裸にして鞭で打つこと」（「ユリイカ」四月）「架空の行為と死」（「三田文学」六月）「渴いた心の語るもの」（「朝日ジャーナル」六月）「原形的な人間の声」（「日本読書新聞」）「特性のないヒーロー」（「現代の眼」一一月）などを書いた。七月、「遠い蟬の記憶」を従兄が始めた「信州の旅」に書き、母親の出身地信州との交流が復活する。一〇月、『考える兇器』（冬樹社）刊行、タイトルは磯田光一の命名である。「簡単な生活」が「The Simple Life」として三島由紀夫編集の『New Writing in Japan』（ペンギンブックス）に収録された。

一九七三年（昭和四八年） 四三歳

全共闘自主講座派の大学教授が集う塾「寺小屋」に文学の講師として参加。個性ある現代っ子達と出遭う。一月、『小林秀雄と中原中也』（レグルス文庫）刊行。また長田弘の要請で一月から「早稲田文学」に新聞の犯罪記事の抜粋を「私の犯科帳」として連載（一二月完結）。五月、『秋山駿批評Ⅰ 定本 内部の人間』（小沢書店）刊行。一〇月、『大岡昇平全集』（中央公論社）の月報に「生の公式」（発表時「大岡昇平ノート」）を連載（七五年完結）。

一九七四年（昭和四九年） 四四歳

一月、「団地通信1 生真面目な喜劇の時代」を「週刊読書人」に発表（以後毎年一回のペースで九三年まで）。三月、「内的生活」を「群像」に連載開始（一二月まで）。五月、父登利男

死す。日本文芸家協会編の短編アンソロジー『文学1974』に序文「現代の『私』とは何か」（発表時「一九七三年の文学概説」）を書く。このアンソロジーの編集には以前以後とかなり長く参加した。六月、『地下室の手記』（徳間書店）刊行。これは昔のノートの残りを活字化したもの。タイトルは編集者の命名、私案ではただ「ノート」であった。

一九七五年（昭和五〇年） 四五歳

二月、『秋山駿文芸時評―現代文学への架橋』（河出書房新社）刊行。四月、『内的生活』（講談社）刊行。五月、「簡単な生活者の意見」を「伝統と現代」に発表。六月、『言葉の棘』（北洋社）、『秋山駿批評Ⅱ 歩行と貝殻』（小沢書店）刊行。七月、「知れざる炎―評伝 中原中也」を「文芸」に連載開始（七七年八月完結）。一〇月、瀬戸内晴美『花芯』（文春文庫）の解説を書く。十一月、『文学への問い（第一対談集）』（徳間書店）刊行。

一九七六年（昭和五一年） 四六歳

一月、「神々しいプラトン」（岩波書店『プラトン全集』11の月報）、「善と悪の問題」（岩波講座『文学』2）、「転回点にきた内向の世代の文学」（『読売新聞』）、「震災孤児の視点―野坂昭如の文学」（『批評のスタイル』所収）を発表。三月、「志賀直哉の『私』について」（『国文学』）、六月、「20代作家の登場―村上龍、高橋三千綱、中上健次」（『読売新聞』）、八月、「戦後』に飽きた文学」（『朝日新聞』）を書く。八月、『秋山駿批評Ⅲ 壁の意識』（小沢書店）刊行。九月、「少女小説礼讃―吉屋信子と佐々木邦」（『現代詩手帖』）、一〇月、「犯罪の形而上学」（『月刊エコノミスト』）、十一月、「デカダンスの―ニーチェ」（『現代思想』臨時増刊）、「簡単な死」（『伝統と現代』）を発表。

一九七七年（昭和五二年） 四七歳

一月、「読売新聞」の文芸時評を担当（八一年一二月まで）。四月、「自分が嫌いな人間―キルケゴール」（『現代思想』）、「都市の犯罪（あるいは光と影）」（『GRAPHICATION』）、七月、中上健次との往復書簡「衰弱した者から元気な病人へ」（『伝統と現代』）など。『架空のレッスン』（小沢書店）刊行。九月、「年増女の風情・ひばりが丘団地」（『週刊読売』）、「心の化学―ドストエフスキーと私」（学習研究社『世界文学全集』37の解説）を発表。一〇月、『知れざる炎―評伝中原中也』（河出書房新社）刊行、長谷川泰子との対談「中也・在りし日の夢」（『国文学』）。

一九七八年（昭和五三年） 四八歳

二月、松原新一、磯田光一との共著で『現代の文学 別巻―戦後日本文学史・年表』（講談社）刊行。私の担当は一九六〇年以降だったが、この仕事は苦手で、大いに苦労、文学史というよりエッセイ調になってしまった（八三年中国語訳、上海で刊行）。四月、中村雄二郎の要請で、M・フーコーを囲んでのテーブル・ロンドに「日本の文学と犯罪、そして、一人の犯行者について」を発表。五月、「新しい時代の駄々っ児―中上健次論」（『新潮』）、七月、「団地という町」（『現代詩手帖』）、十一月、『三浦哲郎自選短篇集』（読売新聞社）の解説、一二月、佐木隆三『復讐するは我にあり』（講談社文庫）の解説を書く。一二月、『批評のス

タイトル』（アディン書房）刊行。この本には、私の主題である「ノートと精神」を、石原吉郎、吉増剛造などの詩をめぐって展開した文章が収められているが、何時、どこへ書いたものが忘れてしまった。

一九七九年（昭和五四年） 四九歳

一月、「悲劇への意思」（初出時「ノートの精神」）を『文芸』に発表。『内的な理由』（構想社）刊行。三月、「舗石の思想」を「群像」に連載開始（八〇年七月完結）。また、中原中也の小評伝（集英社『日本の詩』12）を書く。四月、「忘れ去られた『戦争』」（『文学界』）、これは日本の「無条件降伏」という表現をめぐっての江藤淳の批判に対する私の返事。六月、「この男は恐るべきだ―『歎異抄』を読む」（『現代思想』）を書く。十一月、『文学の目覚める時（第二対談集）』（徳間書店）刊行。一〇月、東京農工大学一般教養部教授（文学担当、九三年まで）、また野間文芸新人賞の選考委員を務めるようになる。

一九八〇年（昭和五五年） 五〇歳

一月、「お金と近代化」（『文学界』）、二月、「団地通信7 市民は政府の玩具」（『週刊読書人』）、八月、「朝鮮―切れ切れの出会い」（『季刊三千里』）を発表。十一月、『舗石の思想』（講談社）刊行。

一九八一年（昭和五六年） 五一歳

三月、『秋山駿批評IV 内的生活』（小沢書店）刊行。七月、『前登志夫歌集』（小沢書店）の付録に「そう、一足ごとの木靴の音」、九月、「溶解から創造へ―開高健の文学」（『新潮』）、一〇月、「『犯罪』への意思」（『群像』）、「三度目の『大菩薩峠』」（富士見時代小説文庫の解説）を発表。

一九八二年（昭和五七年） 五二歳

二月、「身障児の赤ん坊」（『群像』）、五月、『本の顔 本の声』（福武書店）刊行、これは七三年から丸谷才一の誘いで参加した「週刊朝日」の書評を収めたもの。七月、『生の磁場―文芸時評 1977～1981』（小沢書店）刊行。八月、『プルターク英雄伝』（『読売新聞』に四回）、九月、「こころの詭計―嘉村磯多による問い」（『新潮』）、十一月、『『病者』について』（『文学界』）、『『犯罪』について』（『文芸』）を発表。

一九八三年（昭和五八年） 五三歳

一月、「魂と意匠―小林秀雄」（『群像』）の連載を始める（八五年四月完結）。途中、小林秀雄の死によって、三月、「小林秀雄氏の魅力」（『朝日新聞』）、五月、「時を打たない時計」（『群像』）、「小林秀雄の現代性」（『文学界』）など発表。「文学の『暗室』」（発表時「日本における犯罪文学の先駆」、正宗白鳥『人を殺したが…』福武書店の解説）、八月、中野孝次『苦い夏』（河出文庫）の解説、一〇月、「単調な人間」（『文学界』）を書く。『こころの詭計』（小沢書店）刊行。

一九八四年（昭和五九年） 五四歳

一月、「一頁時評」を『文芸』に連載（一二月完結）。

一九八五年(昭和六〇年) 五五歳

三月、「石ころへ」を「季刊手紙」に、九月、「兄の死」、一一、一二月に「家と女たち」

(二回)を「新潮」に発表。一月、『魂と意匠―小林秀雄』(講談社)刊行。

一九八六年(昭和六一年) 五六歳

四月から慶応大学久保田万太郎記念講座の中の「現代芸術」という科目の「前期」を担当。三月、「私とは何か」―埴谷雄高の『発見』(『言論は日本を動かす』2 講談社)、五月、「夫婦と私」(「新潮」)、この夏、「寺小屋」の生徒川端光明に連れられて三泊の韓国旅行をし、その印象「えん―円―韓国旅行」(「えん」創刊号、一月)、一〇月、「批評の一本の簡単な線」(「群像」)、「『罪の感覚』の創造―遠藤周作の懐疑」(「解釈と鑑賞」)を発表。

一九八七年(昭和六二年) 五七歳

一月、「毎日新聞」の文芸時評を始める(九三年四月まで)。二月、「韓国旅行のちぐはぐ」(「海燕」)、三月、「内なる高層ビル」(「KAWASHIMA」)、四月、「賢兄愚弟―磯田光一の死を悼む」(「群像」)、九月、「陸沈の人―深沢七郎逝く」(「週刊読書人」)、一〇月、「新しい私小説へ」(「群像」)を発表。前年の慶大の講義を『恋愛の発見―現代文学の原像』(小沢書店)として刊行。

一九八八年(昭和六三年) 五八歳

一月、『簡単な生活者の意見』(小沢書店)刊行。四月、「単純なものと豊富なもの」(「すばる」石川淳追悼号)、五月、「煙りが眼にしみる―嫌煙権」(「新潮」)、「命の細い糸筋―嘉村礒多『再び故郷に帰りゆくところ』」(「群像」)、書評「藤沢周平『蝉しぐれ』」(「週刊朝日」)、九月、「誤解される人(追悼中村光夫)」(「群像」)、一二月、「信長、大うつ気の心」(「海燕」)を発表。

一九八九年(昭和六四年・平成元年) 五九歳

一月から「人生の検証」を「新潮」に連載(一二月完結)。一月、「団地の感覚」を「読売新聞」に短期連載(全五回)、「いわく不可解―私にとっての『昭和』」(発表時「得体の知れぬ感覚」)、「毎日新聞」)、三月、「矜持に満ちた生―大岡昇平追悼」(「群像」)、七月、「文章の徳(追悼阿部昭)」(「群像」)を発表。八月、「『ユニークな個性』に触れる―九州芸術祭と私」を「西日本新聞」に。思えばずいぶん前から、九州・沖縄文学賞改め九州芸術祭文学賞の選考委員になっていた。また、かなり前から毎日芸術賞諮問委員であり、しばしば芸術選奨文学部門の選考委員であった。

一九九〇年(平成二年) 六〇歳

一月、「床しい言葉に渴く(往復書簡・中野孝次さんへ)」(「群像」)、二月、書評「時代の鏡―江藤淳『全文芸時評』」(「新潮」)、三月、小林秀雄『栗の木』(講談社文芸文庫)の解説、『人生の検証』(新潮社)刊行(第一回伊藤整文学賞になる)。四月、三浦哲郎『野』(講談社文芸文庫)の解説、七月、永山則夫『無知の涙・新版』(河出文庫)の解説、

八月、『柴田鍊三郎選集』18（集英社）に解説「魂の炎」を書く。私はこの選集の編集委員であった。一二月、「私というものを殺す人―追悼永井龍男」（「文学界」）、『永山則夫の獄中読書日記』（朝日新聞社）の解説、『時代小説礼讃』（日本文芸社）刊行。

一九九一年（平成三年） 六一歳

一月、「批評と還暦」（「群像」）、「日本の『純白』の恋」（「国文学」）、「四月、「自虐する作家・川端康成―『一草一花』」（「読売新聞」）、「五月、『知れざる炎』が講談社文芸文庫になる。七月、「深淵を覗く思い―ギリシア悲劇」を『ギリシア悲劇全集』6（岩波書店）の月報に、藤沢周平『蟬しぐれ』（文春文庫）の解説。九月一六日から二九日まで、日中文化交流協会の訪中作家代表団として、三浦哲郎団長、高井有一、黒井千次と訪中、まったくの異国を見るようでもあり、既視感があるようでもあり、感覚が混乱した。中国の作家陳喜儒を識る。九月、「路上の権歌1少年」（「ポエティカ」）、隆慶一郎『一夢庵風流記』（新潮文庫）の解説、一〇月、書評「人生の謎―安岡章太郎『夕陽の河岸』」（「新潮」）を発表。

一九九二年（平成四年） 六二歳

三月、横光利一『寝園』（講談社文芸文庫）の解説、四月、書評「『芒克詩集』」（「L&G」）、ねじめ正一『高円寺純情商店街』（新潮文庫）の解説、五月、「信長」（「新潮」）の連載を始める（九五年一〇月完結）。一〇月、「中上健次の思い出（追悼中上健次）」（「群像」）、一二月、「大きな言葉と小さな言葉」（「文芸・中上健次追悼特集」）、「『大連港で』を読んで」を『清岡卓行大連全小説集』上巻（日本文芸社）の月報に。

一九九三年（平成五年） 六三歳

一月、「病者の感覚」（「群像」）、「大いなる文学の実験者―安部公房氏を悼む」（「読売新聞」）、「団地通信の最終回―『怨望』の時代がはじまる」（発表時「幻想の剥落する」とき）、「週刊読書人」）、「路上の権歌」最終回「偶然」（「ポエティカ」）、「三浦綾子全集」11（主婦の友社）に解説、六月、佐木隆三『身分帳』（講談社文庫）に解説。九月一七日より二六日まで、日中文化交流協会の訪中作家代表団の一員として、三浦哲郎団長、田沼武能らと訪中、京劇の学校がおもしろかった。十一月、萩原朔太郎賞の選考委員になったので、選評「心に滲み入る言葉―谷川俊太郎『世間知らズ』」（「新潮」）など。

一九九四年（平成六年） 六四歳

一月、「砂粒の私記」（「群像」）の連載を始める（九六年九月完結）。四月、「林檎と蛇」（「別冊文芸春秋」春季号）、「厭な奴の話」（「リテラール別冊⑥モーツァルトを聴く」）、六月、「生の伴侶としてのドストエフスキー」（「ロシア手帖」）、八月、『路上の権歌』（小沢書店）刊行、一〇月、「花袋は死なず、生きている」を『定本花袋全集』18（臨川書店）の月報に発表。

一九九五年（平成七年） 六五歳

四月、法政大学文学部日本文学科の非常勤講師になる（九六年まで）。「怖るべき親切」を『大岡昇平全集』7（筑摩書房）の月報に、六月、中国作家陳喜儒の「日本の純文学に関する

レポート」への返信、九月、『大岡昇平全集』12の解説「恋愛、および現代性の研究―『愛についで』を巡って」など。

一九九六年（平成八年） 六六歳

一月、「私―生に穿たれた底無しの穴」（「ビオス」2）、川端康成『たんぽぽ』（講談社文芸文庫）に解説「不思議な作家」、『渡辺淳一全集』12（角川書店）に解説「『現代性』の音調を叩く」、『漱石全集』第一七卷（岩波書店）の月報に「私は困らせられた……」、二月、『岩野泡鳴全集』第五卷（臨川書店）の月報に「額に徴しをもつ者」、三月、『松本清張全集』66（文芸春秋）に解説「『途方もない』作家」、『信長』（新潮社）刊行（野間文芸賞、毎日出版文化賞になる）、七月、「信長の鉄張りの船」を「季刊文科」第一号に、八月、「批評と和菓子」を「あき味」に書く。『人生の検証』が新潮文庫になった。一〇月、岩阪恵子『淀川にちかい町から』（講談社文芸文庫）に解説。一〇月、日中文化交流協会による訪中、三浦哲郎団長、高橋昌男、増田みず子らと、昆明の人と風俗に非常な親しさを感じた。

一九九七年（平成九年） 六七歳

一月、「昆明の美少女」を「波」に、『信長発見（対談とエッセイ）』（小沢書店）刊行。埴谷雄高の死を悼んで、四月、「『死霊』を読んだ頃」（「群像」）、六月、「三輪与志の孤独」（「情況」）を書く。七月、「お寺の記憶」を「月刊住職」に、八月、「永山則夫への懷疑」を「朝日新聞」に、川崎長太郎『抹茶町・路傍』（講談社文芸文庫）に解説、佐木隆三『死刑囚 永山則夫』（講談社文庫）の解説、稲葉真弓『エンドレス・ワルツ』（河出文庫）の解説、『信長 秀吉 家康（岳真也との対談）』（廣済堂出版）刊行。九月、『砂粒の私記』（講談社）刊行。一〇月、「行きつ戻りつ」を「日本経済新聞」に連載（毎週日曜日、九八年三月完結）、「『地獄の季節』―新しい私を発見せよ、という」を『世界文学のすすめ』（岩波文庫別冊）に。十一月、井伏鱒二『夜ふけと梅の花・山椒魚』（講談社文芸文庫）の解説。四月から武蔵野女子大学文学部日本文学科の教授になった。履歴・業績などを細々と書かねばならぬので、そんな世の中になったかと思う一方、大いに閉口した。あわてて思い起こしてみると、これまで記してきた文学賞の他に、次の選考委員をしていた。川端康成文学賞、舟橋聖一青年文学賞、木山捷平文学賞、大阪女性文芸賞、らいらっく文学賞、日本農民文学賞。遠い昔には「群像」新人文学賞もやった。さらに付け加えると、よみうり文化センターの文学教室、朝日カルチャーセンターの小説教室の講師であり、毎年夏浄運寺で開かれる無明塾に中野孝次、窪島誠一郎と並んで講師であり、「朝日新聞」の書評委員を二年ばかり務めたり、ペンクラブ「JLT」の編集委員であったりした。すべて、何時始まって、どこで終わったのか、よくは記憶していない。一二月、日本芸術院会員になる。

一九九八年（平成一〇年） 六八歳

一月、「神経と夢想―『罪と罰』について」（「群像」）の連載を始める（二〇〇二年四月完結）。三月、「婆さん―江戸の面影」を「武蔵野日本文学」に。四月、『作家と作品―私のデッサン集成』（小沢書店）刊行。六月、中国の東北地方へ往く。高井有一団長、高橋昌男、笠

原淳、立松和平、佐藤洋二郎、久間十義らと。ハルビン、大連の人と街に強い印象を受けた。
九月、嘉村礒多『業苦・崖の下』（講談社文芸文庫）に解説。

一九九九年（平成十一年） 六九歳

一月、「余談・閑談」を「新潮」に、『徳田秋聲全集』第一七卷（八木書店）に解説「仮装と真実」、三月、「『家族シネマ』―崩壊家族とは」を「武蔵野日本文学」に、六月、「傷から咲いた花」を「新潮」に、佐藤洋二郎『夏至祭』（講談社文庫）に解説、江藤淳の死によって一〇月、「人生斫断の人」（「新潮」）、「江藤淳の死」（「群像」）。十一月、「批評の透き間」（「季刊文科」）の連載を始める。一二月、『信長』が新潮文庫になった。

二〇〇〇年（平成十二年） 七〇歳

一月、「漱石と江藤淳―二つの生」を「波」に、三月、「中原ならどう読む？」を中原中也記念館・館報に、「『秘められた批評』という領域」を「武蔵野日本文学」に、『新編中原中也全集』第一卷（角川書店）月報に「精神のドラマ」を、四月、「何でもないことを書く」を「新潮」に。六月より二カ月に一回の「時代小説評判記」（「東京新聞」）を始める（〇三年五月まで）。良い時代小説は心をさわやかにするものであった。八月、「『山の人生』へ一言」（「批評の透き間」4）を「季刊文科」に書く。十一月、『小田切秀雄全集』別巻（勉強出版）に「内向の世代から」を書き、『信長 秀吉 家康』が学研M文庫になった。

二〇〇一年（平成十三年） 七十一歳

三月、武蔵野女子大学を定年退職。四月、四〇年住み馴れたひばりが丘団地の賃貸2DKが建て替えになるので、歩いて一〇分くらいの都市公団賃貸3LDKに引っ越す。一四階で見晴らしはいいが、この年齢の引っ越しは大騒ぎで、いまもって何一つ片付かず、手帳、メモ、紙片、掲載誌がどこにどうあるのか見当らない。一月、『瀬戸内寂聴全集』（新潮社）の月報に「小説家の誕生」の連載を始める（〇二年完結）。三月、『世界の中の三島由紀夫』（勉強出版）に「三島由紀夫とヴァレリー」、八月、「漱石の『こころ』は奇妙だ」（「批評の透き間」7）を「季刊文科」に、九月、金庸『碧血剣』（徳間文庫）に解説を書く。一〇月、『片耳の話』（光芒社）刊行、『志賀直哉全集』補巻3（岩波書店）の月報に「『暗夜行路』と私」を、「臓器移植と肉食い」を「大法輪」に、十一月、「懐しい顔―追悼・畑山博」を「文学界」に、一二月、「『暗夜行路』と『罪と罰』」（「批評の透き間」8）を「季刊文科」に。

二〇〇二年（平成十四年） 七十二歳

四月、武蔵野女子大学文学部日本語・日本文化研究科客員教授に招かれる。文学部にくる女性には、卒業論文より卒業制作（小説）を望む者が多くなったからであろう。四月、「出て来い、内田魯庵や山路愛山」（「批評の透き間」9）を「季刊文科」に。そのあと中国の戦争の天才を描く宮城谷昌光『奇貨居くべし』（中公文庫）、五月、宮城谷昌光『楽毅』（新潮文庫）の解説、六月、『大城立裕全集』5『日の果てから』（勉強出版）と解説がつづいた。七月、「批評だって芸術なのだ」を『小林秀雄全集』別巻Ⅱ（新潮社）に書く。九月、『舗石の思

想』（講談社文芸文庫）を刊行。日中文化交流協会の一員として訪中、北京や上海のシンポジウムに参加、中国作家の声の多様性に時の流れを感じた。また、「戦後残照」（「日本経済新聞」）の連載を始める（一二月まで）。

二〇〇三年（平成一五年） 七三歳

一月、「中国十日間の印象」を「新潮」に、「新しい魅力を創造―井上雄彦『バガボンド』」を「週刊読書人」に、高村薫『マークスの山』（講談社文庫）の解説。二月、自分の心が生きたラスコーリニコフを描く『神経と夢想―私の「罪と罰」』（講談社）を刊行（第一六回辻哲郎文化賞を受けた）。三月、文芸時評「今日という時代の空気」を「群像」に、六月、「炭焼き、農地解放、法然」を「季刊文科」に。『信長発見』（朝日文庫）を刊行。七月、「文学の葉脈（のち『私小説という人生』と改題）」（「新潮」）の連載を始める。老齢になって文学への恩返しのため（〇六年五月完結）。中村光夫・三島由紀夫『対談・人間と文学』（講談社文芸文庫）の解説「対談による精神のドラマ」。九月、「わが街わが友」（「東京新聞」）の連載（全二〇回）、「少年の理由なき殺人と文学」を「西日本新聞」に（発表時「少年の理由なき殺人」）。十一月、「文学は衰退しているか」を「季刊文科」に。

二〇〇四年（平成一六年） 七四歳

一月、川村二郎、加藤典洋と「創作合評」（「群像」）。「美文の深さ、怖ろしさ」を「抒情文芸」に、二月、「フセインと『罪と罰』」を「季刊文科」に、三月、「始皇帝と信長」を「現代詩手帖」に、四月、「小説は今日の中身描く―芥川賞の二作を読んで」（「朝日新聞」）を書く。八月、富岡幸一郎の活発な議論に触発された『信長と日本人―魂の言葉で語れ！』（飛鳥新社）を刊行。「拉致問題をめぐって」を「季刊文科」に、九月、「赤とんぼ」を「小説現代」に。一〇月、「中野孝次・良く生きた人」を神奈川近代文学館・館報に。『小説家の誕生 瀬戸内寂聴』（おうふう）刊行、聴くということが物語の原点であり、女性的なものであると感じた。十一月、旭日中綬章を受ける。一二月、痛くなかったので、からだの衰弱を老化と錯覚、突然胃ガンと言われ、東京医科歯科大学附属病院に入院、腹腔鏡手術にびつくり、一カ月弱で退院した。

二〇〇五年（平成一七年） 七五歳

一月、『批評の透き間』（鳥影社）を刊行。五月、「風俗を描く凄さと巨きさ―丹羽文雄の文学」を「毎日新聞」に、七月、「信州の自然の救い」を「信州の旅」最終号に、九月、『小林秀雄対話集』（講談社文芸文庫）に解説「潔い、男らしい声」、「『倦怠』へと到るとき」を「季刊文科」に、一〇月、「花袋の従軍記と震災日記」と「戦後の還暦、『贅沢』の変化」を二日つづきで「東京新聞」に書く。また、「三浦哲郎の私小説家魂」を『作家生活50年 三浦哲郎の世界』（デリーー東北新聞社）に寄稿。一月、大学のあり方評価委員（私学連盟）を務める。一二月、妻・法子が重い帯状疱疹を患い閉口する。

二〇〇六年（平成一八年） 七六歳

一月、元日の夕、痛さ募った法子を医科歯科大病院の救急窓口へ。六日から一ヵ月ばかり入院。「薄田泣菫の随筆」など四編を俳句誌「狩」に。何でもないことを書く随筆がわたしには大切になった。三月、武蔵野大学（武蔵野女子大学を改称）を退職。四月、「女子大でのお笑い種・続々」を「季刊文科」に、五味康祐『柳生武芸帳』（文春文庫）に解説、五月、宮城谷昌光『香乱記』に解説。六月、「生のスタイル（奥野健男さんのこと）」を奥野展のパンフレットに。七月、「ちあきなおみの歌を聴いて」を「季刊文科」に、歌声の深さにやっと気が付いた。一〇月、「戦争の子、東京の子―追悼・吉村昭」を「群像」に。十一月、NHKラジオ「私の日本語辞典」に出演、「自己をみつめることば」（全四回）。座談会「藤沢周平の魅力語る」（週刊「藤沢周平の世界」創刊号・朝日新聞社）に参加。一二月、『私小説という人生』（新潮社）を刊行。

二〇〇七年（平成一九年） 七七歳

一月、「遠方の友へ」を「群像」に、三月、西部邁、富岡幸一郎との座談「人生の表現、魂の描写」を「表現者」に。同月、早稲田大学から芸術功労者の表彰を受ける。四月、「生の歩行と共に（中原中也）」を「現代詩手帖」に、五月、粟津則雄と対談「私のドストエフスキー」（「三田文学」）、「『私小説という人生』余談」を日本近代文学館・館報に、六月、山本兼一『火天の城』（文春文庫）に解説、七月、「東京に悪の華を」（「法政文芸」）で、わが青春時の思い出を懐しく振り返った。

（著者編）